

「日本史推進委員会の博学連携の一年」

—歴史資料の教材化を目指して—

鎌倉学園高校 風間 洋

はじめに

新歴史科目「歴史総合」や「日本史探究」導入を契機に日本史推進委員会(以下、本会)が神奈川県立歴史博物館(以下、県博)との合同例会を継続して、4年が経とうとしている。この間の合同例会の経緯や活動内容については、既に本会誌51号にて報告しているので参照されたい。今年度からは、教員・学芸員の協業で新歴史科目を視野に入れて神奈川県地域資料を用いた教材開発をする準備に入っている。まずは、学芸員の方が各専門の立場から館蔵資料の紹介と教材化の視点を解説され、これに対し教員が歴史教育の立場から意見や提案をする形式を中心に三回の例会を重ねてきた。以下、概略を報告する。

2024年5月29日@県博講堂／佐藤兼理学芸員(考古)「博学連携の可能性を探る」、梯弘人学芸員(中世)「県博所蔵の戦国大名北条氏関連文書について」、樋口美咲学芸員(中世絵画)「中世絵画・肉筆画のコレクション紹介」、寺西明子学芸員(近世)「近世資料のご紹介」と各専門分野から、県博の所蔵資料群の特徴、高校の歴史教育課程での教材化の可能性の展望と問題点等を紹介していただいた。その後の懇談では、「なぜ博学連携するのか?」「連携して何をを目指すのか?」「学校と博物館が歴史資料に求める目的の違い」等の基本的な問題の共有、さらに「日本史探究」で求められる構想や仮説を立てる単元での博物館の実物資料の利用の有効性が確認された。

2024年9月25日@県博講堂／嶋村元宏学芸員(近世・幕末)より、幕末のペリー来航を西洋人側から描いた絵画資料を糸口に解き明かす特別展「かながわへのまなざし」の展示の狙いおよび関連資料の紹介がなされ、その展示を受けて林晃之介教諭(逗子開成高)より、勤務校の土曜講座という特別授業でのハイネ筆『日本遠征記』を題材とした資料への批判的な読解と解釈、歴史的な文脈の中で理解する実践が紹介された。

2024年11月22日@県博講堂／学芸員へ現在の学校での歴史教育での資料の扱いを理解していただくために、高橋俊介(神奈川総合産業高)・本田六朗(横浜緑園高)両教諭から、勤務校で実践している「歴史総合」科目の状況や課題が報告され、学芸員から該当単元に対する歴史資料の取り扱いや解釈、近年の研究動向などの助言を得ることができた。また、中世東国の芸能史を扱った特別展『仮面絢爛』を渡邊浩貴学芸員の解説していただいた。

おわりに 今後の連携作業

2024年12月より、県博は施設改装のために長期閉館となって県博を会場とした例会開催は不可能となるが、今後も年3回程度、学芸員に高校会場の例会に来ていただき、館蔵の地域資料の教材化の協業は継続していく。この過程で原始・古代～現代までの授業事例が集積・洗練され、その成果を公開することで、県内の歴史教員にも利用してもらえる道筋を整えるのが、当面の目的と考えている。日本史分野にとどまらず、県博には近代以降の開港地横浜を中心とした「世界史探究」の教材としても有益な館蔵資料がある。科目を横断して幅広い分野の教員に本会の博学連携の研究会に参加していただき、授業モデル・教材集の集成にご支援いただきたいと思います。

《参考文献》風間・桐生海正・高橋俊介「博学連携の試み」『歴史分科会研究報告』51号2023年